

## ふくいの教育振興推進会議での議論

## 要 旨

## (1) 計画全般に関して

- ① 標準化は日本の教育の特徴であり、底力とも言われるが、子ども一人ひとりにあわせて個別解を作らないといけないという話もある。福井県の学力・体力はすでにトップクラスであるから、これからは、芸術・文化など、子どもの個性に合ったものを自由にやらせることも重要である。
- ② 学力面の取組みをどんどん進めると、勉強についていけない子どもが出てくる。子どもの個性が光るような、希望が持てるような包括的な計画にまとめてほしい。
- ③ 計画内容が盛りだくさんに示されると、学校現場も一杯一杯になってしまう。目標を達成した項目はスクラップできるとよい。
- ④ 学習指導だけでなく、生活指導の面でも学校が役割を担うことを期待されている。多くの学校では外部人材の活用に取り組んでいるが、その範囲が広がるほど教員の負担が増える部分もある。
- ⑤ 1個1個の論点に深く入ってしまうと、必ず仕事は増える。一方で、業務改善の話がある。全体の仕組みを議論しないと、本質的な解決にはならない。
- ⑥ 世の中は多くを教育に期待するが、負担は軽減しないといけない。要請を素直に受け取るだけでなく、整理、選択して、シンプルにしなければならない。
- ⑦ 県内一律で対応しなければならない県の施策と、地域の特性を生かした市町の施策を精選しながら、ビルド&スクラップしないといけない。あれもこれも続けていくと、教員も子どもも疲弊して、結局全体が滞ってしまう。
- ⑧ 越前市の小中学校には、ポルトガル語を母国語とする子どもが多数在籍している。日本語のわからない外国人児童生徒が、言葉や文化の壁につまずいて、日本に溶け込みにくい実態がある。

## (2) 幼児教育に関して

- ① 現行計画は、家庭教育や乳幼児教育の部分が弱いように感じる。
- ② 自己調整能力や言語力の育成は、小中高校では遅い。幼児期から児童期の最初に読書体験を積み上げないと、質の高い読書はできない。例えば、小中学校で実施している巡回図書を、幼稚園等でも実施してはどうか。

- ③ 保育者はシフト制で働くようになっている。個人を抜き出して研修する時代ではなく、いかに情報を共有して、園全体としてどう専門性を向上するかが重要である。
- ④ 中学校や高校になって急に保護者のネットワークを作ろうとしてもできない。幼児教育の段階からそうした理解を進めて行けば、全国的にもよいモデルになる。
- ⑤ 保護者が子育ての知識を得る発信型の講座も大事だが、いろいろな専門性を持つ保護者を活用して、園を豊かにするという発想があってもよい。

### (3) 読書活動に関して

- ① 読書量を増やすためには、各教科において、学校図書館を活用した授業を展開することが重要である。
- ② 学校の一斉読書（朝の読書）を設定すると不読率は下がるが、どんどん他のものに置き換わっていて、基礎力が弱くなっていると感じる。
- ③ 読書推進計画を作成していない市町は意識も薄いので、県だけでなく、市町と一緒にやっていけるような取り組みを考えていただきたい。
- ④ 福井大学でも活字を読まない学生が増えており、それが教員の質にも関わってくる。幼小中高に大学を入れた一貫性のある接続の視点が大事である。
- ⑤ 読書や課題解決型学習は、結果を出そうとすると失敗する。結果が重要視されると、形だけ作って終りになってしまう。スマートフォンの普及など、社会全体が本を読まない、ものを考えなくてよいように動いている中で、学び方・学ぶ力が身に付いたかをていねいに見ていくことが大事である。
- ⑥ 新聞を読む子どもは、文章の読解力・理解力が高い。もっと授業の中に新聞を取り入れてほしい。

### (4) 英語教育に関して

- ① 英語のスピーキング力をつけるには、相手に伝えたいという気持ちを育てることも大事。受験英語ではなく、実際に英語を使う場所や機会をたくさん作ってほしい。
- ② 英語は道具に過ぎない。基本的な日本語力や論理的な思考力を高めないと意味がない。

#### (5) 教職員の資質向上に関して

- ① 福井県の教育は充実しており、子どもたちは受け身になりがちである。そうした教育を受けた子どもは、素直で優等生だが、個性がない。特徴ある生徒も認めてあげる。そのような時に、教員も特徴があった方がいい。
- ② キャリア教育を進めるに当たっては、教員と地元企業の共通理解を図りながら進めることが大事。教員には社会性がない人が多いので、自ら能動的に行動するためのツールとして、名刺を持たせてはどうか。まずは、教員の資質向上が大事。
- ③ 子どもの変化、成長を学級通信などで保護者と共有できると教員もやる気が出る。福井県はそこを大事にしている。その特徴を生かしたイメージアップ戦略により、教職の魅力をうまく広報できるとよい。

#### (6) 学校現場の業務改善に関して

- ① 5S（整理・整頓・清掃・清潔・躰）など民間の手法を学校に取り入れることと、現場の意見を聞くことが大事。組織マネジメントで学校をどう改善するかを考えないといけない。
- ② 個人情報保護への配慮や部活動指導が負担になっている。個人情報の取り扱いについては、一律に規律を適用せずに、各学校の保護者ネットワークで特別なルールを作れないか。また、世田谷区は各小中学校に父親中心のボランティア組織があり、そういう教員や保護者が本音で議論できる場がたくさん出てくると、要求も減るかもしれない。部活動は、やりがいを感じている教員もおり、工夫が必要である。
- ③ 保護者から要求されるレベルが上がっており、学校としてどこまで対応するかをマニュアル等で具体的に示す必要がある。
- ④ 時間管理や事務作業の効率化も大事だが、教職員のスキルを上げることで、質的に負担感を減らすことも必要。仕事のストレスは、量的負担と仕事のコントロールの掛け算であり、仕事のコントロールとは仕事の裁量である。自分の能力が生かされているという実感が大事である。
- ⑤ 小中学校には、スクールカウンセラーが配置されている。問題行動の未然防止という点で、幼稚園等にもカウンセラーを配置できないか。